

いわかづみ

令和三年十二月 第八七号

- ◇ 村の景観と歴史・人物(6)
- ◇ 民具が語る生活史(民具⑭スゲガサ)
- ◇ 方言一考(こつぺこ)
- ◇ モノ言うもの(関谷学園資料④)
- ◇ 歴史館行事の報告・お知らせ

村の景観と歴史・人物(6)

垂水城址と四人の荒川伊豆守候補

渡辺 伸 栄

荒川に架かる温泉橋の右岸下流、湯沢の地に垂水城址があります。垂水の里の西側断崖上の杉林の中、そこに、整然とした縄張りの城郭が隠れています(写真①)。平地に作られた館形式の城で、垂水館址とも言います。この城の主・垂水源二郎に上杉謙信が授けた感状(レプリカ)が歴史館に展示されています。館正面玄関前の看板にも書いてあります。

皆さんよくご存じのことと思います(写真②)。永禄四(一五六二)年、第五回川中島合戦でのことです。



写真①

川中島合戦と言えば、謙信・信玄の一騎討ちです。長野市の古戦場で、両雄対峙の立派な銅像を見た人も多いでしょう。NHKの大河ドラマなどで、ここまで国民的名場面になってしまうと、今さら、あれは作り話だ、史実ではないなどと、声高に叫ぶのも気が引けてしまいます。

写真②



だからでしょうか、歴史館の看板は、「幾つかの歴史書には荒川伊豆守が突入したと書いてあり」などと、遠慮がちです。

実は、幾つかの歴史書どころではなく、れっきとした上杉家の正史(正式の歴史書)「上杉家御年譜」には、はっきりと書かれています。永禄四年川中島合戦で、先陣の若武者五将が一万余の兵で信玄陣營急襲、五将の一人荒川伊豆守長實が信玄を見つけ斬りかかったと(巻一謙信公編一七〇〜一七五頁)。

「関川村史」には、謙信が信玄に斬りつけ

たとしているのは「上杉年譜」だとありますが（一九七頁）、これは明らかな誤記です。

続けて「村史」は、謙信ではなく荒川伊豆守だとしているのは「上杉史料集」だと書いていますが、これも正確ではありません。この史料集は、いくつかの書籍を集めたもので、それらのほとんどは軍記物（物語）です。一騎討ちは謙信だとする書あり、荒川伊豆守だとする書あり様々で、いずれにしる、物語なので史料としては劣るとされています。そもそも、謙信・信玄一騎討ちの話は、軍記「甲陽軍鑑」から始まったといわれています。しよせん、話を面白くするための作り話です。では、荒川伊豆守とは何者でしょうか。

ここで再び歴史館の看板です。「この武将（荒川伊豆守のこと）こそ垂水源二郎であり」と言い切っています。が、少々心配になります。「関川村史」は、源二郎の祖先が一時、荒川氏を名乗ったことを根拠にしています。しかし、それは川中島合戦から三百年も前のことです。それに、歴史館展示の謙信感状は、垂水源二郎殿となっていて荒川伊豆守宛になってないのがこの説最大の弱みです。ともあれ、これが候補の一人目です。

なお、看板には伊豆守は謙信の影武者かとして書かれていますが、そうでないことは「上杉

年譜」を読めば分かります。

第二候補は、我らが上関城主・三瀧掃部介です。一騎討ちの年より七年前の第四回川中島合戦で大殊勲をあげた武将です。三瀧家の家譜には、掃部介は荒川城に居住とあり、その子出羽守は、高野山文書に荒川の三瀧と記され、さらに、孫の左近助には、荒川条を与えるという景勝の文書があります。つまり上関城の地は荒川、三瀧氏こそ荒川氏を名乗る資格十分なのです。が、残念なことに、「上杉年譜」の天文二十三（一五五四）年川中島合戦の記録、謙信の陣構えに水間掃部介と荒川伊豆守、両者並んで登場します（三瀧は時に水間とも書かれます）。これでは、同一人物にしようもありません。

第三候補は、大沼俣爾著「新発田の古城物語」にあると、会友の小林弘氏からの情報です。読むと、新発田に荒川城あり、その主が荒川伊豆守だとあります。しかし、前後関係に記述の乱れあり、根拠は荒川の地名だけで希薄、候補としては劣弱と言わざるを得ません。

県発行「新潟県史」には、天正三（一五七五）年謙信軍役帳に記載の荒川弥次郎は上郡の国人領主とされています。上越市を流れる関川は、荒川ともいわれました。これからすれば、上越荒川流域を領した武将が、第四の

候補になる可能性はあります。

このように荒川伊豆守の特定は困難ですが、この武将が実在し、川中島で信玄に斬りかかったことは事実でしょう。

しかし、もはや謙信・信玄一騎討ちの物語は大衆の支持を確固たるものにしていています。皆それで喜んで、観光にも役立っているんだから、それでいいじゃない、誰も困るわけでもないし・・・歴史は、話の面白さの方にもうしてもベクトルが向いてしまします。それで、今さら異を唱えたところで誰も喜ばないことが結構あるのです。身近にもです。困ったものです。

民具が語る生活史

民具⑭ スゲガサ(菅笠)



11月6日(土)、「大久保峠・宇津峠」歩きが行われ、参加者の方々と錦繡の置賜地域を堪能しました。令和三年度の峠歩き参加者・スタッフのみなさん、応援してくださった方々、ありがとうございました。

十三峠は越後からは米沢街道と呼ばれる、山形県の置賜地方と新潟県の下越地方を結ぶ古道です。大永元（一五二二）年に伊達政宗の曾祖父、伊達植宗（だてたねむね）が大里峠を開いたことにその歴史は始まります。十三峠が大い

に賑わった江戸時代には、米沢方面からは布の材料となる青苧(あおそ)または撰苧(えりそ、よりそ)、煙草、米などが、越後方面からは鉄、塩、肴類、綿織物などが行き来しました。基本的には徒歩であり、荷は馬、牛や背負子によって運ばれました。明治十七(一八八四)年、山形県初代県令三島通庸(みしまみちつね)により小国新道が開通され、役目を終えました。

歴史館行事の十三峠歩きに参加されるみなさんは、どなたも素敵なたレッキングスタイルです！それでは、江戸時代の旅人は一体どのような格好で峠を歩いていたのでしょいか。

文政三(一八二〇)年に鳥飼洞斎によつて著された江戸時代の旅行マニュアル『諸国行程大日本道中指南車』の旅人必携リストには、次のような物が挙げられています。：衣類・脇差・三尺手拭・頭巾・股引・脚絆(きやはん)・足袋・甲掛け・矢立(筆記具)・道中記・財布・差し刀・耳かき・小算盤・秤・薬・針糸・髪結道具・煙草・提灯・蠟燭(ろうそく)・つけ木・合羽(かっぱ)・菅笠(すげがさ)…。マニュアル本が出るほど、江戸時代には旅が盛んになりました。この中で、今回はスゲガサ(菅笠)を取り上げます。スゲガサは名前の通り、スゲやカヤ、麦藁などから作られたかぶり物の総称です。雨や雪、直射日光を防ぐことができます。平安時代にはすでに市女笠(いちめがさ)、桔梗笠(きき

よがさ)がありました。使用者は身分の高い人に限られていました。江戸時代になると使用者は一般に広まり、三度笠、加賀笠、平笠などが生まれます。頭にあたる部分には台座(五徳)がついています。入手には色々な手立があつたようですが、明治と昭和初期ころの霧出郷には長井からの行商人が売りに来るものだったようです。風通しがよいため蒸れず、また雨や雪に強いので、農作業や雪かきにぴったりです。円盤型のスゲガサは主に男性が、饅頭型のタイプは女性が使います。

山形県でスゲガサといえば花笠まつりですが、この花笠の様に全国各地の民俗芸能、特に風流(ふりゆう)系では、人々が笠をかぶって踊る姿が見られます。風流系とは、平安時代に始まる装束や作り物などに意匠を凝らした(＝風流の)集団が、厄神・怨霊を鎮魂する目的で楽をはやしたり踊ったりしたことに始まる芸能の系統です。江戸時代に入ると、趣向を凝らして人目を奪うといった風流の精神は失われ、固定化された踊りとして各地の農村に定着しました。念仏踊や盆踊り、雨乞踊、虫送り、剣舞(けんばい)、願人踊(がんにんおどり)、花笠踊、祭礼囃子、三匹獅子舞など、多くの民俗芸能・民俗行事の源流となつたとされます。ここでの笠は日よけ、雨よけの道具ではなく、神の依代(よりしろ)としての呪具(じゅぐ)の機

能を持ち、笠に色々な飾りを施す例が多く見られます。踊り手が笠をかぶり個性を捨てることにも何かしらの意味があるように思います。

江戸時代の街道は、暑い夏や雪深い冬も、様々な目的の人々や物資が行き交つていたことでしょう。スゲガサをかぶり草鞋を履いた先人が通つた道を、ぜひ来年度もご一緒しましょう♪(田村舞子)

参考文献 民具学会編一九九七

「カサ(笠)」『日本民具辞典』

ぎょうせい出版

スゲガサをこよなく愛されている方は、にやむや歴史館に姿を見せてください！



方言一考・ハッペイハベ

生意気な事を言つて「こっぺこいでんなよ」と親から叱られた経験は多くの人がお持ちだろう。「こっぺこべ」とは「きいた風な口をきく」とか「分かつた振りをして理屈を言う」、つまり「知つたかぶる」というような意味合いである。「こっぺ」は全国的に散見する方言で、内面を伴わないで表面的な様子をいうようだから「こざかしい」とか「ませている」という意味でも使われる。

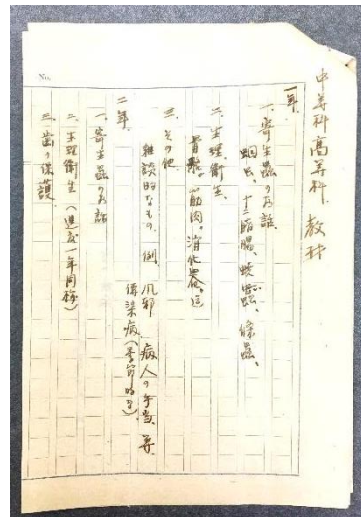
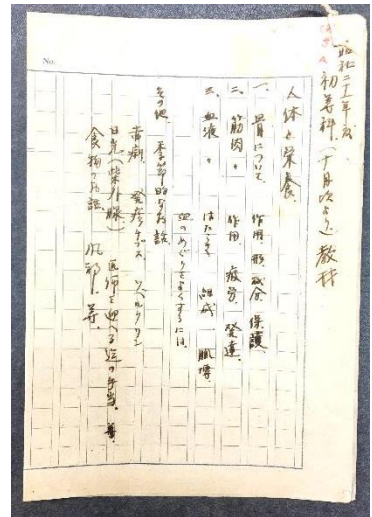
ひと夏、花壇作りに余念のなかったKさん、今年の作業を概ね終えたのか、軽トラは駐車場の片隅にひっそりと置かれたままだ。芍薬も軽トラも寡黙で、彼の相手としては好都合なのであろう。

彼との付き合いは彼が退職して某保存会の事務局長を務めた時からである。見た目も悪いし横柄だし「こつぺこぐ」しで長所は見い出し難かったが、文化財を担当していた私は接触を避け難かった。おまけに仕事が遅いから、締め切り間際の書類づくりを一人で徹夜でやることなどは恒例で、そうするうち「こつぺこぐ」の本性が分かってきた。無駄に愚直で一本気なだけなのである。喜寿を迎えようとする彼は依然見てくれなど気にせず今日も駐車場を回ってゴミ拾い。天然記念物級だなあ、と思いつながら遠くから観察させていただいている。(安久)

モノ言つもの・関谷学園資料④

戦後一年と経たないうちに全国に先立って開園した関谷学園は、新教育の象徴であり希望そのものであったから、全国からの視察が頻繁に訪れている。しかしいかんせん、新しい教育を模索するための学校であったから、教科書も指導書さえ無い有様であった。そして物資も欠乏を極めていた。そういう中で授業自体は担当

する先生の創意工夫に任せられたのであるが、



そんな授業が視察に堪えるものであったどうか疑問である。おそらくは課題だけを感じて帰ったのでなからうか。写真は保健担当の先生が書いた指導内容である。初等科、中等科、高等科の別に箇条書きしてある。「十月頃より」初等科には「人体と栄養」、中等科には「寄生虫のお話」などの記載が見える。赴任した先生も通い始めた児童生徒もバタバタの学園生活の中で、それでも自由という空気を胸いっぱい吸い込んでいたことが想像できる。(安久)

歴史館行事の報告

○秋の健康登山「高坪山縦走」

10月30日(土)、総勢23名。

○良寛の歩いた峠を越えて④

「大久保峠・宇津峠」11月6日(土)、総勢35名。

○歴史講座計三回 関川村の文化財調査委員の佐藤忠良さんによる歴史講座が行われました。関川村の災害史、名字からわかる村の歴史について教えていただきました！

○古文書解読講座 冬季は毎週水曜午後一時半から映像ホールで行っています。新年は1月5日(水)はお休み、12日(水)から行います。

○伊藤航子日本画展、「ご来館いただきありがとうございました！」

お知らせ・今後の行事の予定

○村民ギャラリー「新春書道書初め展」、会期：令和4年1月4日(火)～1月30日(日)です。

○「山と花のスライド解説会」令和4年1月16日(日)、13時半～15時半、村民・友の会会員無料、30名募集、会場は村民会館休養室です。
 ☆年末年始の休館のお知らせ 12月29日(水)～令和4年1月3日(月)まで休館します。4日(火)からまたよろしくお願ひします。

いわかがみ 第八七号

発行日 令和三年十二月

編集発行 せきかわ歴史とみちの館

tel10254-64-1288 Fax0254-64-0300

